・況んや　復た　千餘里の外に投するをや
・昔は榮花　簪組に縛せられ
・今は貶謫　草莱の囚と為る
・月光　鏡に似て罪を明らかにすること無し
・風氣　刀のごとくにして　愁を破らず
・見るに随ひ　聞くに随ひて　皆慘慄
・此の秋　獨り　我が身の秋と作る

通釈

・黄色にやみつかれ萎えしわんだ血色のない顔、霜をかぶっているかのような白髪頭（これも、老いたる身の必然）
・ましてや、京都より千五百里も離れた西の果てに追いやられた私の容姿がどうなっているかは言うまでもなかろう。
・今思えば、昔、京に居て得意の時代、私はかんざしや組ひもをして正装で宮中に伺候していたものである。（束縛も多かったが心に張りがあり充足した日々であったことよ）
・ところが今は貶謫の身、仕官する束縛から解放されたものの、日々の生活は生い茂る雑草の中の田舎暮らし。（牢生活をさせられているのと大差はない。）
・月光のさやけさは鏡面そのもののようだ。（本当の鏡なら人に罪がなければ明らかに顔面を写し、罪科があれば鏡面は曇るというのに）こんなにも明らかに照り輝いているのに、私の無実を何一つ証してはくれない。